

## 天理スポーツ シンポジウム⑧

(前号、橋本和典氏の講演の続き)

ソフトボールについて、今度は投げる方です。やはり障害の程度によっては、ボールを押さえることはできても投げる事ができません。その人はどうでしょうか。「その人はボールをピッチャッと押さえたらアウトにしよう。フライのキャッチと同じようにする。それでいいな」となりました。

実際にグラウンドソフトボールという視覚障害の人たちのソフトボールがあります。この場合、全盲の競技者がいるのですが、ボールを取るときに体の軸を動かさずに、体内キャッチをすればアウトにするというルールがあります。それを適用しました。そして今度、守備側が結構考えるのですね。その対象の人をバッターが打った球を超えさせなければならないラインに並べる。打球がこのラインを超えると後ろの守備範囲が広がってしまうし、対応に時間がかかります。だからラインのところで速く対応してアウトにしようと考えます。そうすると、今度はバッターが、ラインのところにいる守備の間を打球が抜けるようにコントロールしなければならない。このように、みんなの意見を取り入れながらルールや用具を変えていくことで、障害の種類、程度の違う30人余りの人たちが、ひとつのソフトボールというゲームを楽しむようになります。それからはもう、スポーツ訓練の時間には「先生、今日もソフトボールか?」と言ってくるようになり、ものすごく積極的になりました。

その結果、みんなの総合的な行動能力が上がりました。例えばあまり歩けなかった人が1km歩けるようになる。また、若干ですが走れるようになる、というような様々な効果が生まれるようになりました。そこでふと気づきました。これが何でできなかったのだろう。いろいろ考えた時に、「一番最初に、障害がある人たちが対象だから、普通のことはできないだろう。なにか特別なことを考えなければならない。」そう考えたことにそもそも間違いがあったのでした。

それから意識を180度転換しました。障害があっても基本的には何でもできるんだ。できないことはむこうから言ってきてくれるから、その時に、お互いにこれできるか? あれできるな、こうすればできるな、と相談しながらできる方法を探していけばいい。グッドマン博士の“失ったものを数えるな。残った機能を最大限に活かせ”。別の言い方をしますと、“できないことを探すのではなくて、できることを探す努力をする”ということがものすごく大事なのです。

障害者のスポーツといいますが、私は障害者スポーツという特別なスポーツはないと思っています。今ある、皆さんがやっておられるスポーツを、障害がある人たちがうまく、それこそ、最高のパフォーマンスを出せるためにはどういう工夫をすればいいのかを考える。それが我々、指導員の役目です。そして、我々指導員仲間にも「ツブヤキを大事にしようよ」、とよく言います。今、センターの体育館の中で、電動車いすのサッカーをやっています。これも最初は彼らのツブヤキからです。障害者の人達といろいろ交流をする中で、例えば、Jリーグのサッカーを見ている時、重度の障害の方が「サッカーカッコイ

いなあ、僕らもできたらいいのになあ。だけど、電動車いすだったら、とてもじゃないけど無理。」そのツブヤキを、「そうやなあ」と、そこで言ってしまったら終わりです。

「ちょっとまってよ、一緒に考えてみよう。足で蹴る代わりに、電動車いすをポンと当てる、あるいは回転を利用してボールをキックしてみたらいいんじゃないか。」「だけど、普通のサッカーボールだと車いすの下にもぐり込んでしまうので。」「そして、もぐり込まないように、ボールを大きくしたらいいやん。」ボールのサイズは今はワールドカップの基準になって直径が32.5cmですが、元々日本の国内ルールだったのは、20号という直径50cm近くのボール。そういうボールを電動車いすで押したり、回転力を利用して弾いたりしてやっています。そうするとやはりコートが大きさが問題になります。電動車いすなので屋外でする訳にはいかないから体育館で行う。どのコートを使うか、バスケットボールのコートを使うか。「あのコートに10人も入れへんで。」「そして、人数を減らしたらええやん。」ということで、今の電動車いすサッカーは4対4ということになりました。

その他にも、さまざまなスポーツで工夫を重ねました。

私はアーチェリー関係のことをしていますが、障害者スポーツは長野パラリンピック以来、多くのメディアによって国民の皆さんにだいぶ認識されるようになりました。その中には、すごいなあ、あんなことまでできるんだ、という感嘆の声もありますが、その裏には、あるパラリンピックの大会で、パラリンピックの選手がちょっとふざけすぎた部分がありまして、「パラリンピックの選手があのような状態でいいのか」というようなお叱りを受けたこともあります。ですから、これからの障害者スポーツも市民権を得て、いろいろな場面で皆さんの目に止まる機会があるかと思いますが、我々指導者の立場からすると、今後選手の皆さんが競技者としてのマナーを身につけていくようなことをしていけないといけないのかなという思いをしています。

障害者スポーツについては、競技スポーツに対しての嗜好性が非常に強くなっています。だけど、障害がある方は競技というメリットばかりではないのです。ほぼ、寝たきりに近い人達、やっとなら外出ができる人達、さまざまなレベルの障害をお持ちの方がいます。そういう方たちが少しでも社会に出ていけるように、体力づくりのお手伝いをするために指導員も健康スポーツとして、体力を向上させるようなスポーツ活動に力を注ぐべきではないかと思っています。障害者スポーツ指導員は現在、上級・中級・初級という制度があります。全国で約21,000人の指導員がいますが、その85%ぐらいが初級の指導員です。この方たちの役割には非常に大事な部分があり、そういう障害のある方たちをスポーツの場に出してくるきっかけ作りをしてもらう。いろいろな交流の中でこういう活動も楽しいけど、一度気持ちのいい汗をかいてみない? こんな行事あるよ。こんど見に来てみない? 参加してみない? というような形でスポーツへの動機付けをしてもらう。こうしたことを我々指導者組織が一丸となってやっていきたいと考えています。